

# 淨瑠璃寺吉祥天厨子扉繪 解説

東京美術學校藏

今尙淨瑠璃寺に傳ふる所の吉祥天を祀る厨子の扉板であるが、近世故あつてこの扉板と扉金具に代る革具の若干とが寺外に流出したものである。扉板凡そ七面、正面外側に竹雀圖を描き、同内面に梵釋二王、兩側に四天、裏板内面に辯才天及び諸神を圖す。その旨趣はか金光明最勝王經序品第一の薄伽梵の頌に

金光明妙法	最勝諸經王	甚深難得聞	諸佛之境界	、、、、、	
專注心無亂	讀誦聽受持	由此經威力	能離諸災橫	及餘衆苦難	無不皆除滅
護世四王衆	及大臣眷屬	無量諸藥叉	一心皆擁衛	大辯才天女	尼連河水神
訶利底母神	堅牢地神衆	梵天帝釋王	龍王緊那羅	及金翅鳥王	阿蘇羅天衆
如是天神等	并將其眷屬	皆來護是人	晝夜常不離		

と云へる如く、此の經を聽き受持する諸善人の爲に之等諸天の皆來擁護するの狀を顯はすものであらう。唯梵釋、四王、辯才天、訶利底母神の如きは圖に就て夫と指摘することを得るが、圖に於て訶利底母神に對するもの、又上部二神將の如きは未だ必ずしも精確に尊名を擬し難い。依て更に經に就いて檢するに卷第六四天王護國品第十二中には四天王宮、乃至梵宮及び帝釋、大辯才天、大吉祥天、堅牢地神、正了知大將、二十八部諸藥叉神、大自在天、金剛密主、寶賢大將、訶利底母、五百眷屬、無熱惱池龍王、大海龍王所居之處と見え、又卷第九善生王品第二十一には梵天帝釋主、護世四天王、及金剛密主、正了知大將、無熱池龍王、及以娑揭羅、緊那羅樂神、蘇羅金翅王、大辯才天女、并大吉祥天、斯等上首天等の名目が見え、又堅牢地神品、僧慎爾耶藥叉大將品を立つる等の點より見て、訶利底母神に對するものを堅牢地神、上二神將中の一を僧慎爾耶

淨瑠璃寺吉祥天厨子扉繪解説

藥叉大將即ち正了知大將に宛つることが出来ようかと思ふ、恐らくは向つて右上の鉾鐵を執る神將即ち之であらう。他の一神將に至つては遂に尊名を詳にせぬ。吉祥天像に就いては既に本誌六號に之を紹介したが、この吉祥天竝に厨子に關して傳ふる所ある資料は誠に乏しい。淨瑠璃寺唯一の古記とも言ふべき淨瑠璃寺流記には

建曆二年

同年 月 日 吉祥天奉渡本堂丈六

の記事を見、淨瑠璃寺縁起には

吉祥天者三尺五寸立像也 聖武天皇聖作傳之初安傍小堂

建曆二年順德院 渡本堂

とある。現存流記は足利期の寫本、原本の成立年代も定かならぬ上、吉祥天に關する記載も、恐らくは何等かの據ありしものなるべけれども、奉渡の時日頗る明確を缺き、流記成立當時に於て採用したる資料そのものが既に根本的資料に非りしにやと疑はしむるものがある。縁起に至つては固より前記流記の文を修したるもの、唯嘗て本堂の傍の小堂に安置せりと言ふものは未だ必ずしも論者の所謂奉渡の字義を誤解するの餘り架空の事實を列ねたるものとは解せられない。何れにせよこの二記に所謂吉祥天が今傳來する所の吉祥天なりや否や、古記の記述は常に簡略に過ぎて、その當否を定めるに苦しむものがあるが、この場合は恐らく現存吉祥天に關する記述として誤あるまい。さるにしても流記の記述は本寺に於て最も重要な九躰阿彌陀に關し何等言及する所なき等、全體として甚だ完備せざるものがあり、吉祥天夫れ自身に關する記載にも前述の如き疑點があり、他の有力なる旁證なき限り、未だ之を以て建曆二年造立と斷ずるには多くの躊躇すべき點がある。更に前述資料の説く所は何れも吉祥天のみに關するものであつて、何等厨子に觸れる所はないが、こは様式上同時の作とするに何の妨げもなく、前段吉祥天に關して言ふ所はすべて同じくその厨子に關して言ひ得るものと思ふ。

轉じて扉繪の様式を見る。既に諸家によつて説かれた如く、背景に樹木を按排し、前に石塊を配するその構圖と、諸天の様相とは、全く天平の古式を逐ふもの、而して細部技巧は藤原時代末期に近き特色を示すものと見られる。こゝに見らるゝものは藤末と言ふも固より殆ど鎌倉中期に及ぶまで或種のものに見らるゝ所であつて、假に本像竝に扉繪が建曆二年に造立せられて、しかもかくの如き特色を示すとすも、それは毫も不思議とするに當らないのである。以上説ける所は何れも瑣末の論のみ、吾人の最大の興味を繋ぐる所以のものは、如何なる理由によつて藤末鎌初の交にかゝる古様の造像が行はれたかにある。當時淨瑠璃寺に傳來する所の古像の朽廢するものがあつて、之に代つて造顯せられたとするは最も單純な解釋であるが、之を立證すべき何等の資料なきと共に、新造を必要とするまでに朽廢せるものを摸して、かくまで完全に細部を再現し得たとも考へ難い。鎌倉時代に瀰漫せる復古主義の風潮に乗じて造顯せられしものとするは固より一見解である。さるにしても直接の動機たりしものがなくては叶はぬ。或は、嘗て廢典となつてゐた吉祥悔過會が、古式復興の機運に促されて再興せらるゝが如きことあつて、之に際して新造せらるゝものが古様に則るかゝの如き像であつたであらうことは最も自然なる想像である。吉祥悔過會は天平の古に捫り、何時頃廢絶したかは明かでないが、實資の小野宮年中行事に「正月八日諸國吉祥悔過事」とあるによつて藤原末期まで存続したりしことを知り得る、然し廢絶の時代も、亦再興のこともありしや否やも遺憾ながら文献の上に之を訊ぬること難く、到底單なる想像に止まらざるを得ない。

嘗て像と厨子と相離れて傳存するを悼み、昭和八年初頭、帝室博物館、東京美術學校の好意に依つてこの二者を合し、舊に復して古を偲んだことがある。第九圖に掲ぐる所はその記念すべき面影であつて、吉祥天像、厨子扉等は即ち舊時のものである。

## 大雅筆五百羅漢圖

解説

京都 萬福寺藏

過海羅漢の圖は吳道子に初まると稱し、王維または是を畫いたと傳へるが、後代殊に文人畫家の好み作つた如き圖様のものは概ね五代宋初から發生したらしい。かの黃山谷の渡水羅漢畫の題記に、老少相倚り相助けて、或は既に水を涉り、或は未だ涉らざる情狀の頗る變化を極めた事が述べられてゐるが如きは古例として最も注意すべきものに相違ないのであらう。元明には固より之を畫いた畫家が尠くないが、この大雅の圖の據る所は人見少華氏の指摘によれば同じ黃檗山中に藏せられてゐる元の王振鵬の款記ある禮音圖卷であつた。此圖卷には隱元の序があり、一度徳川家へ獻せられて間もなく返戻されたと云ふ由來を持つものであつて、人見少華氏「大雅畫を中心」圖中明かに此襖のそれと同型の尊者形が多く見出され、大雅の參考となつた事は疑ひないものであるらしい。

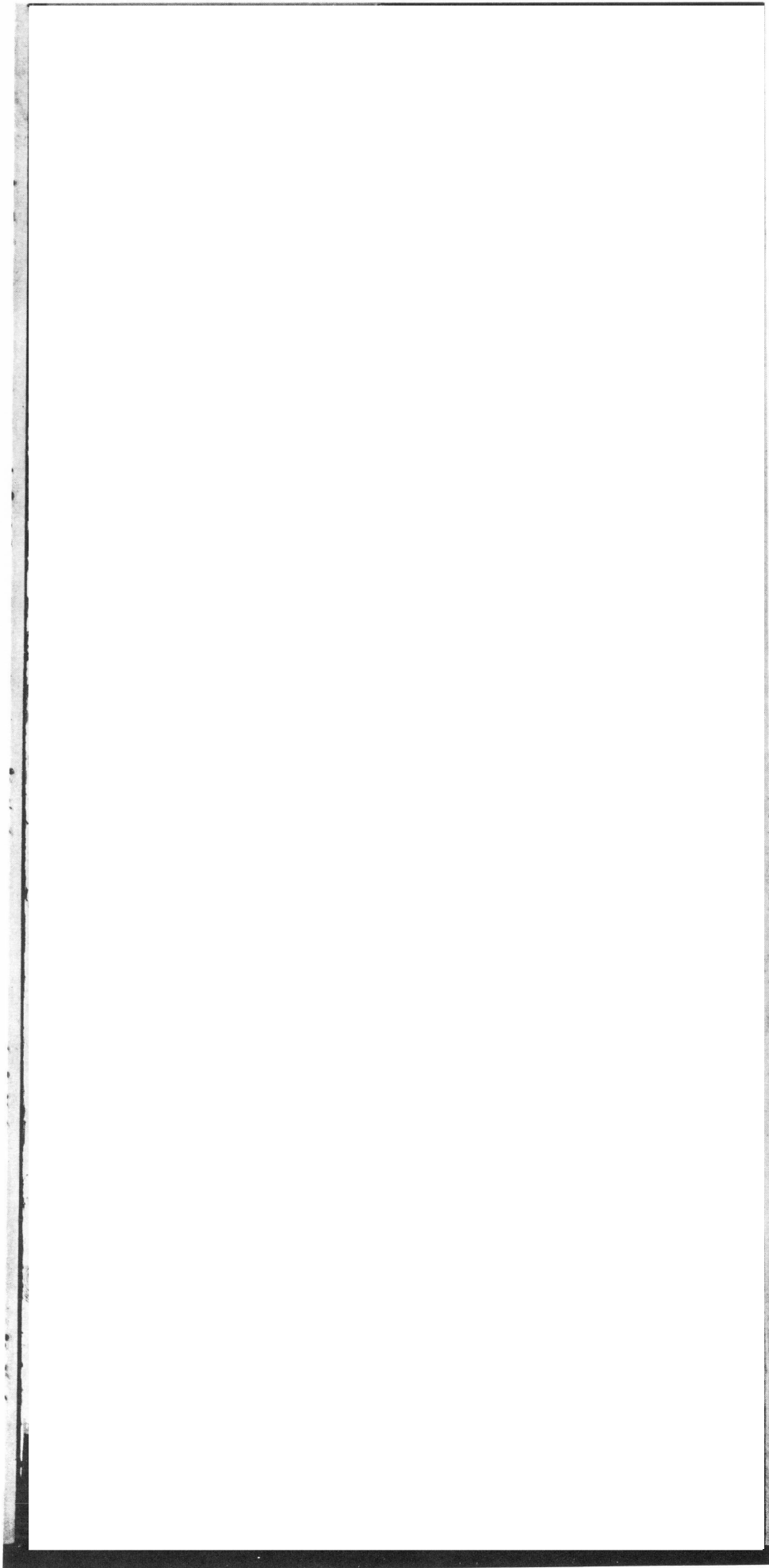
但しもとより一は横卷、一は障屏で、大小の差は云ふまでもないと共に、布景の繁簡深淺に至つては兩者全く連絡なしと云ふに近く、茲に却つて大雅の工夫の跡を明かにし得るのは興味ある限りである。のみならず此圖は本誌田中氏の論説に明かな如く珍しくも大雅の指頭畫の例で、恐らくは凡そ指頭畫なるものゝうちの稀な大作でもあるのであらう。即ちこの超俗異形の尊者達の累々たる群塊を畫くにこの奇法に出で、一には筆路の抑揚斷續による繁褥の感を避け、一にはこの幻假の殊景に愈々標揚の趣を興へんとしたと云ふか、何れにせよ粗放に似て然らず、街ひ易くしてあくまで象形の眞を失はざる高致には洵に三嘆の外はない。同寺の西湖圖と共に大雅の最優作の一に加へて愧ぢなきものであらう。唯配景、著彩には筆を併用し、又人見氏の説によれば紙捻を用ひて

淨瑠璃寺吉祥天厨子屏繪 梵天 帝釋天

東京美術學校藏



淨瑠璃寺吉祥天厨子扉繪 廣目天 增長天



東京美術學校藏



淨瑠璃寺吉祥天厨子屏繪 竹雀





淨瑠璃寺吉祥天像及厨子



像  
厨子  
京都淨瑠璃寺藏  
東京美術學校藏